

コウノトリ生息エリアの 魚類図鑑





はじめに

なるとしおおあさちよう
鳴門市大麻町は、コウノトリがくらす全国的にもきちょう貴重な場所です。
コウノトリが生きていくためには、エサとなる生きものがたくさん生息できる環境がなければいけません。

魚はコウノトリのエサとして、とても重要です。コウノトリを守っていくことは、魚が生息できる環境も守っていくということなのです。

この図鑑では、大麻町でよく見かける魚を紹介しています。これらはどれも小さな魚ですが、よく見るときれいな色やおもしろい形をしています。この図鑑をとおして、コウノトリのエサとしてだけではない、魚のみりよくを感じてもらえればうれしく思います。

さあ、この図鑑といっしょに
コウノトリがくらす水辺へ出かけましょう！

目次

魚のからだ	2
魚のつかまえ方	4
コウノトリ生息エリアにすむ魚たち	6
ギンブナ	8
ヤリタナゴ	9
カネヒラ	10
シロヒレタビラ	11
タイリクバラタナゴ	12
オイカワ	13
ハス	14
ワタカ	15
モツゴ	16
コウライモロコ	17
ドジョウ	18
ボラ	19
カダヤシ	20
ミナミメダカ	21
スズキ	22
ブルーギル	23
オオクチバス	24
シマヒレヨシノボリ	25
マハゼ	26
この図鑑でとりあげられなかった魚たち	27
コラム	28
レッドリスト	28
外来種と放流	29
特定外来生物と生態系被害防止外来種リスト	30



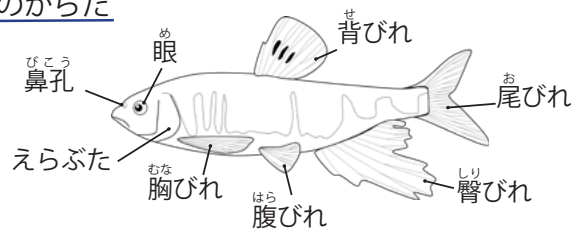
魚のからだ

魚を見分けるには、魚の形をきちんと観察することが大切です。魚のからだの各部分の名前を知って、魚の種類を見分けましょう。

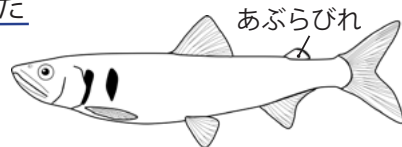
■ 鰭

魚の鰭には、背びれ、臀びれ、腹びれ、胸びれ、尾びれがあります。サケやアユのなかまでは、これらの鰭にくわえて、尾びれの少し前の背中側に“あぶらびれ”があります。ナマズのなかまにも“あぶらびれ”を持つものがあります。また、ボラやスズキ、ハゼのなかまでは背びれが2つに分かれているものもあり、前のものを第1背びれ、後ろを第2背びれと言います。ハゼのなかまでは、左右の腹びれがくっついて、ひとつの吸盤きゅうばんになっています。

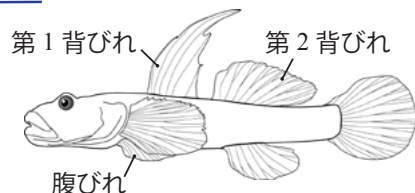
コイのなかまのからだ



アユのなかまのからだ



ハゼのなかまのからだ



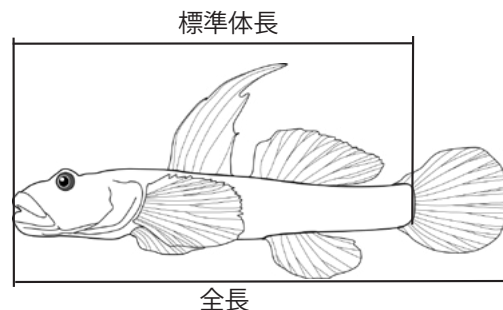
■ 大きさ

① 標準体長

上あごの前端ぜんたんから尾びれの付け根までの長さです。

② 全長

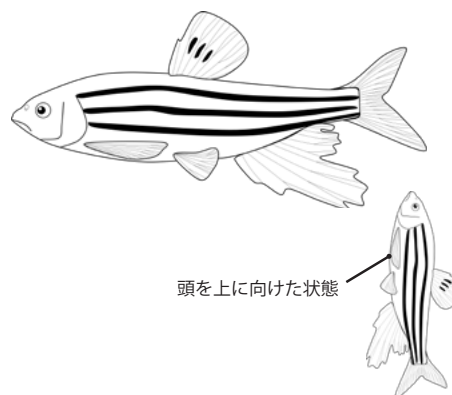
からだの前端から尾びれの後端こうたんまでの長さです。



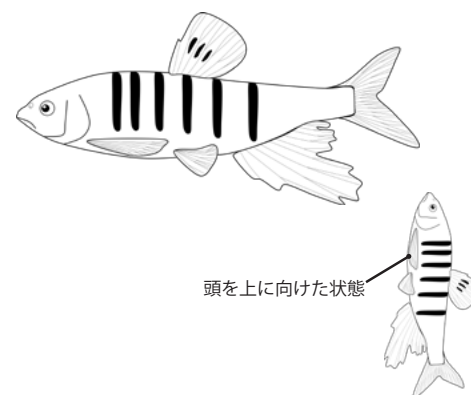
■ 模様

魚のからだにあるしま模様はヒトのように頭を上に向けた状態じょうたいを基準として、「縦じま」なのか「横じま」なのかを判断はんだんします。下の図の左側が「縦じま模様」、右側が「横じま模様」です。

縦じま模様の魚



横じま模様の魚



魚のつかまえ方

泳ぎまわる魚をじっくり観察するには、つかまえる必要があります。しかし、魚も簡単にはつかまってくれません。ここでは魚をつかまえる方法や注意点をかんたんに紹介します。

■ 準備

タモ網、ウェーダー（胴長）、ライフジャケット、軍手（ゴム製の手袋でもよい）、魚を入れて観察するバケツ・アクリルケース

夏場：帽子、日焼け止め、塩分のとれる飲み物

魚を持ち帰る用意：乾電池式のエアerpンプ、ふた付きのバケツ



■ つかまえ方

- ①水底にタモ網を固定
- ②足で魚を網の中に追い込む
- ③タモ網を引き上げる

うまくつかまえるコツ！

魚が隠れていそうな植物や石の下流側に網をかまえ、足をつかっていきおいよく魚をおどろかせ、網に追い込むように誘導する。



■ 注意点！

魚をつかまえる時には、危ないことや、やってはいけないことがあります。魚をつかまえに行く前に、しっかりと確認しておきましょう。

● 一人で魚とりに行かない

水辺に行くときは複数で。小学生以下の場合は、大人と一緒に魚とりに行きましょう。

● 川や水路の状況をしっかりと確認する

雨などで、川や水路の水がいつもより多い時には水辺に近よってはいけません。

● ライフジャケットを着用する

ウェーダー（胴長）を着ている時に深みにはまると、ウェーダーに水がたくさん流れ込み、しずんだり、さかさまに浮いてしまったりして、おぼれる危険があります。水路にはいろんなものがしずんでいるので、サンダルなど入ることも危険です。

● 危険な生きものに気を付ける

マムシやスズメバチ、マダニ、毛虫など、かまれたり、刺されると危険な生きものがいます。虫よけスプレーをつかったり、肌を出さないような服で出かけましょう。草むらに入る時には、マムシがいないか棒などで確認しましょう。スズメバチが近くに飛んできても、手で追い払ったりせず、じっとしていきましょう。マムシにかまれたり、スズメバチに刺されたらすぐに病院に行きましょう。

● 田んぼや畑、人の家の敷地に無断で入らない

田んぼや畑では、農家の方が大切に作物を育てています。勝手に入ってふみあらしたり、あぜ道をくずしてはいけません。

● 魚をとりすぎない

大麻町周辺には、絶滅が心配される魚もくらしています。自分が観察したり、飼育したりする最低限の数をつかまえて、とりすぎないようにしましょう。

コウノトリ生息エリアにすむ魚たち

魚をつかまえたら、次はその魚がなんという名前なのかを調べましよう。大麻町のコウノトリ生息エリアでは、8つの魚のなかま（科）がよく見られます。まずは魚をよく観察して、どの魚のなかまなのかを調べましよう。

この図鑑につかった写真はオイカワ、オオクチバス、カワバタモロコをのぞいて、すべて大麻町でつかまえた魚を撮影したものです。

魚の名前

カタカナで書かれている“標準和名”とアルファベットで書かれている“学名”があります。この図鑑では、魚の標準和名と学名を細谷（2019）の図鑑に従っています。

魚の名前の例

標準和名：シマヒレヨシノボリ

学名：Rhinogobius tyoni

属名 種小名

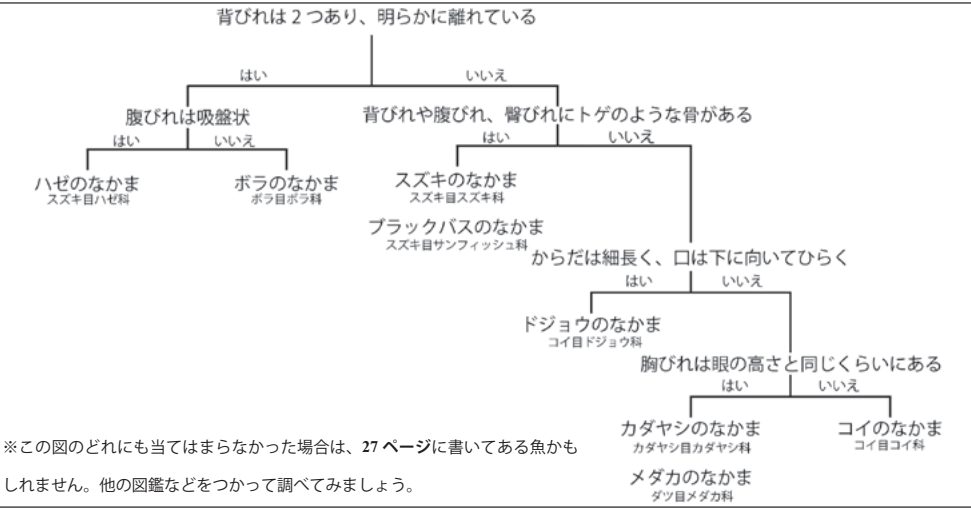
生物の学名は、属名と種小名から成り立っていて、このような表記方法を“二名法”といいます。日本では、人の名前が姓・名で成り立っていることが多く、学名とよく似た構造になっていますね。

“標準和名”は、日本で学名のかわりにつかわれる生きものの名前です。この他にも、日本では各地域で特有の“地方名”と呼ばれる生きものの名前があります。

例えば、徳島の吉野川周辺では、ヨシノボリのなかまを“じんぞく”と呼ぶことがあります。

魚を調べる

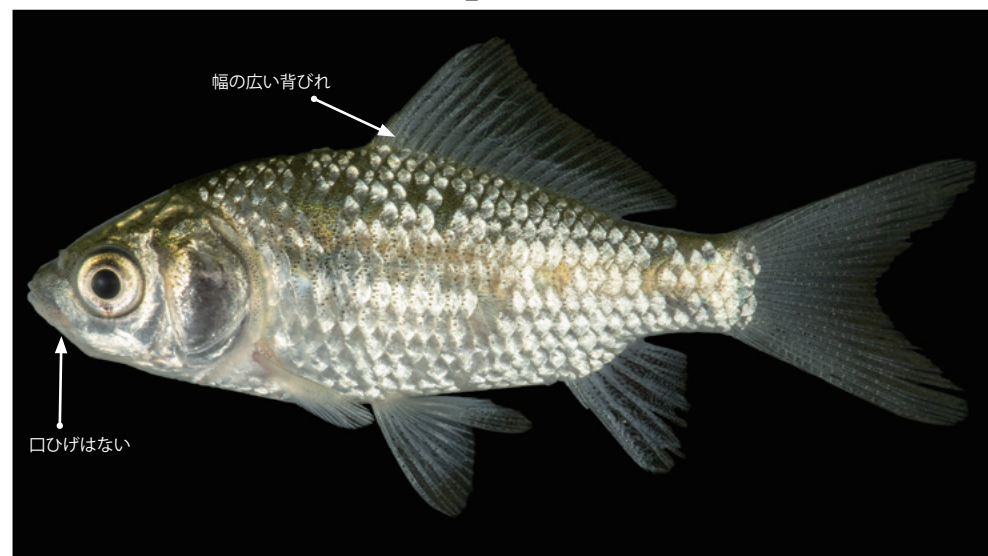
つかまえた魚の形を観察して、下の図をつかってどのなかまなのかを調べてみましょう。



上の図でどのなかまのかがわかったら、下の図から当てはまるなかまのページを探しましょう。それぞれのなかまが解説されているページを見れば、その魚がなんという種なのかをくわしく調べることができます。

コイのなかま →8～17ページへ	ドジョウのなかま →18ページへ	ボラのなかま →19ページへ
カダヤシのなかま →20ページへ	メダカのなかま →21ページへ	スズキのなかま →22ページへ
ブラックバスのなかま →23～24ページへ	ハゼのなかま →25～26ページへ	

ギンブナ *Carassius* sp.



ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 3 ～ 30 cm

【からだの特徴】^{とくちょう} フナのなかまの中では、ゲンゴロウブナの次からだが上下に大きく、尾に近い部分（尾柄）^{びへい}も上下に大きいです。また、他のフナのなかまにくらべて、口さきがややほそくとがることが多いです。コイとはちがい、口ひげはありません。

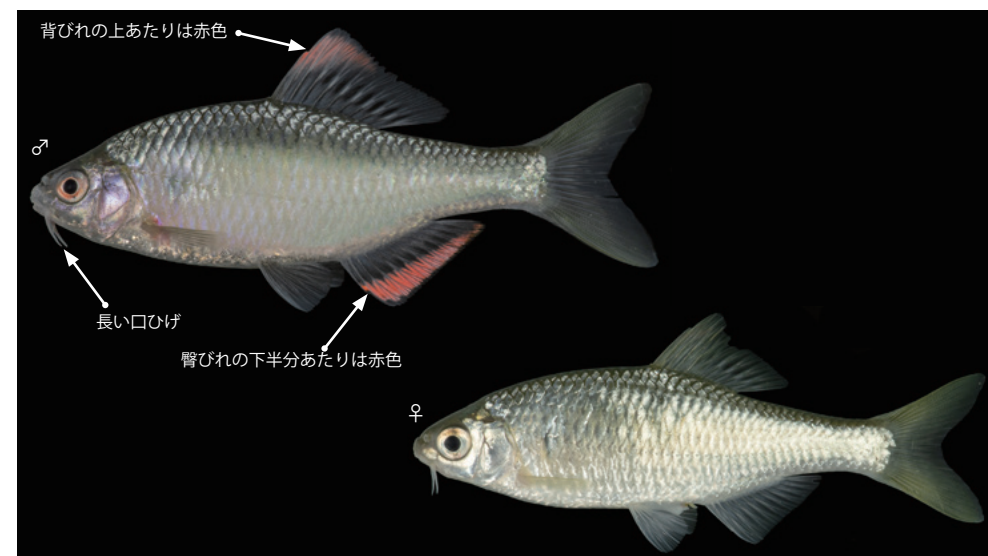
【生息場所】^{せいそくばしょ} 大谷川や大谷川につながる水路に生息し、レンコン田やビオトープなどにも入ってくることがあります。水中の底の方から中層を泳いでいることが多いです。

【繁殖期】^{はんしよくき} 4 ～ 5 月頃

【その他】^{はんしよくき} 繁殖期には、産卵のために田んぼに入ってくることがあります。ギンブナの中には、染色体^{せんしよくたい}を多く持った3倍体や4倍体とよばれるものがいて、これらのメスは、親と子供が全く同じ遺伝子^{いでんし}を持ったクローンで増えることがわかっています。

（執筆：上田悠哉）

ヤリタナゴ *Tanakia lanceolata*



写真の上がヤリタナゴのオス（♂）、下がメス（♀）

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 5 ～ 8 cm

【からだの特徴】^{とくちょう} ヤリタナゴはタナゴのなかまの中では、からだが上下にあまりひろがらず、ほっそりとしています。長い口ひげがあるのも特徴^{とくちょう}です。オスでは背びれの上あたりと臀びれの下半分くらいが赤っぽい色になります。

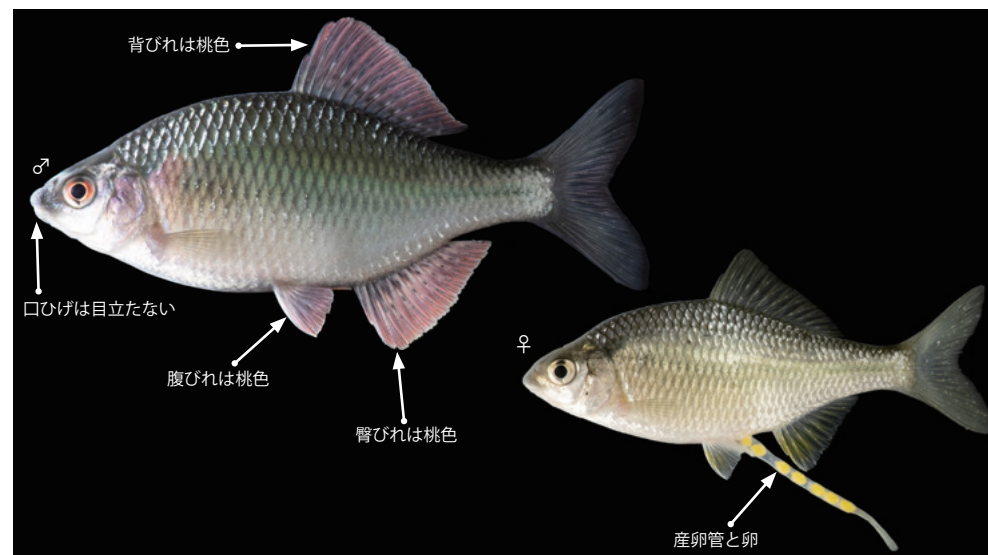
【生息場所】^{せいそくばしょ} 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。やや流れのあるような場所を好み、水中の底の方から中層あたりを群れになって泳いでいることが多いです。

【繁殖期】^{はんしよくき} 4 ～ 8 月頃

【その他】 タナゴのなかまはマツカサガイなどの二枚貝に卵を産み付けます。二枚貝の中に卵を産み付けるため、メスは産卵管^{さんらんかん}という器官^{きかん}を持ちます。2020年の環境省版レッドリストと2014年の徳島県版レッドリストでは『準絶滅危惧』に選定されています。

（執筆：井藤大樹）

カネヒラ *Acheilognathus rhombeus*



写真の上がカネヒラのオス（♂）、下がメス（♀）

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 5 ～ 12 cm

【からだの特徴】 日本のタナゴのなかまの中では大型の種です。口ひげがありますが、ヤリタナゴのように長くなく、あまり目立ちません。オスは繁殖期になるとからだは青緑色に、背びれや腹びれ、臀びれが桃色になります。

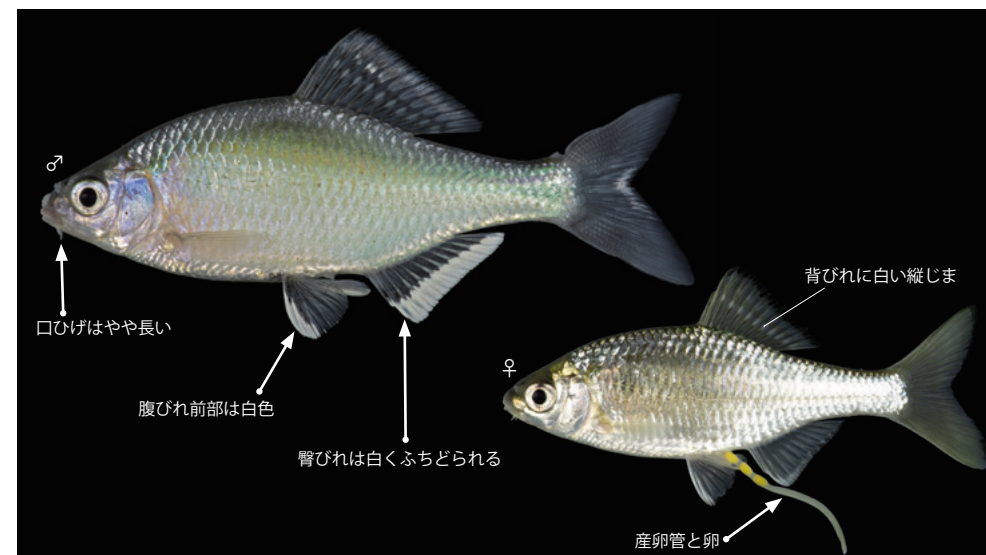
【生息場所】 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。水中の底の方から中層あたりを群れになって泳いでいることが多いです。

はんしよくき
【繁殖期】 7 ～ 11 月頃

【その他】 タナゴのなかまには、春に産卵するものと秋に産卵するものが知られています。カネヒラは秋に二枚貝に産卵し、仔魚は二枚貝の中で冬を過ごし、5月頃から貝から出て泳ぎだします。2014年の徳島県版レッドリストでは『留意』というカテゴリーに選定されています。

（執筆：井藤大樹）

シロヒレタビラ *Acheilognathus tabira tabira*



写真の上がシロヒレタビラのオス（♂）、下がメス（♀）

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 5 ～ 8 cm

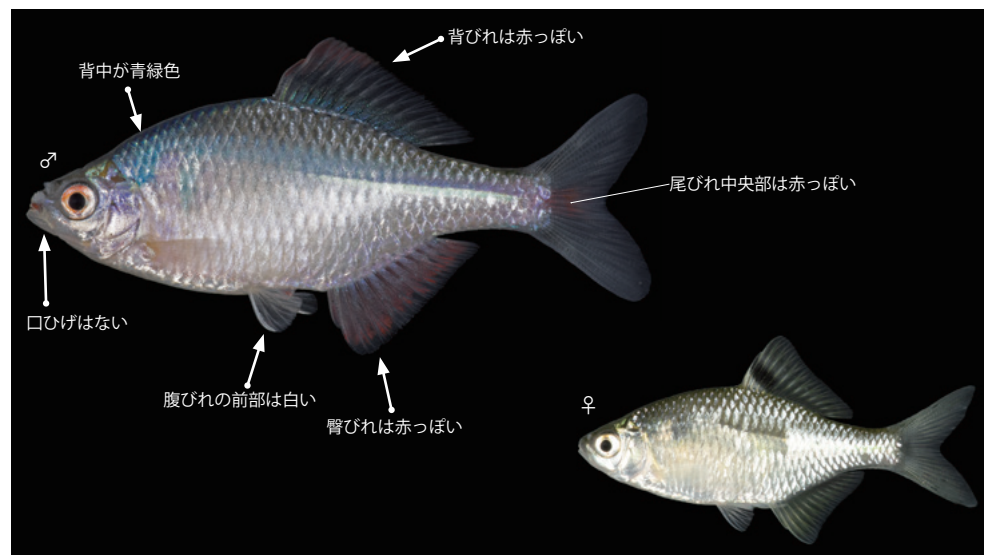
【からだの特徴】 ヤリタナゴよりはからだは上下にひろがりますが、カネヒラよりはほっそりとしています。口ひげもヤリタナゴほどは長くありませんが、カネヒラより目立ちます。オスは繁殖期になると腹びれの前部と臀びれが白くふちどられます。

【生息場所】 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。やや流れのある場所を好みます。水中の底の方から中層あたりを群れになって泳いでいることが多いです。

はんしよくき
【繁殖期】 4 ～ 9 月頃

【その他】 メスはヤリタナゴのメスとよく似ていますが、背びれに白色の縦じまがあることで見分けがつきます。2020年の環境省版レッドリストでは『絶滅危惧 IB 類』に選定されていますが、徳島のシロヒレタビラは他の地域から持ち込まれた国内外来種である可能性があります。

（執筆：井藤大樹）

タイリクバラタナゴ *Rhodeus ocellatus ocellatus*

写真の上がタイリクバラタナゴのオス（♂）、下がメス（♀）

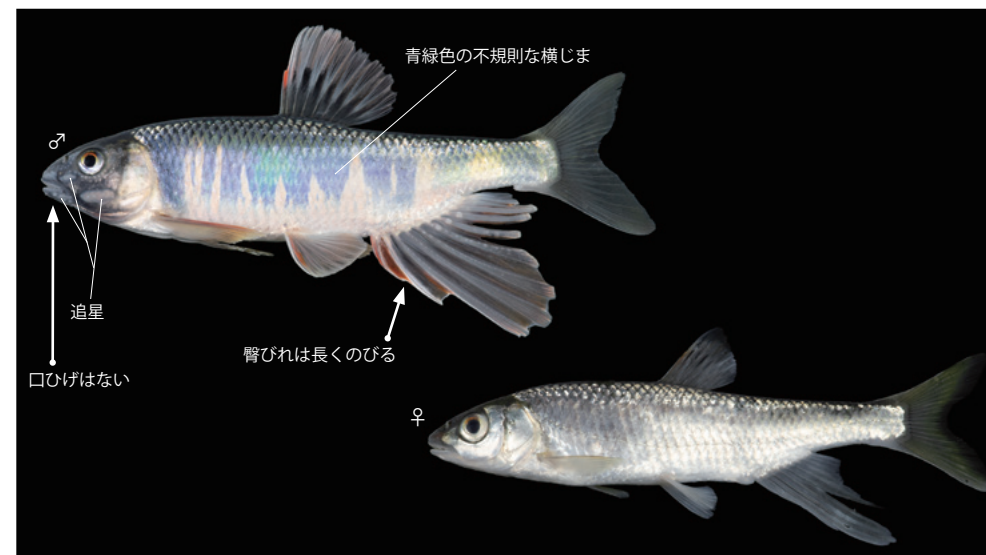
ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 3～6 cm

【からだの特徴】 大麻町周辺で見られるタナゴのなかまの中でもっとも小さな種です。口ひげはありません。オスは繁殖期になると、背中が青緑色に、胸から腹部や、尾びれの中央部、背びれ・臀びれが赤っぽくなります。

せいそくばしょ
【生息場所】 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。水中の中層から表層あたりを群れになって泳いでいることが多いです。

はんしよくき
【繁殖期】 3～10月頃

【その他】 日本には、ニッポンバラタナゴしか生息していませんでしたが、中国からタイリクバラタナゴが持ち込まれ、全国に広がりました。ニッポンバラタナゴと交雑してしまい、現在、純粋なニッポンバラタナゴはほとんどいなくなってしまいました。タイリクバラタナゴは環境省と農林水産省により『総合対策外来種』に指定されています。
(執筆者：井藤大樹)

オイカワ *Opsariichthys platypus*

写真の上がオイカワのオス（♂）、下がメス（♀）（園瀬川産）

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 8～12 cm

【からだの特徴】 オイカワの最大の特徴は長い臀びれです。特に繁殖期のオスは臀びれが長く、赤色になり、口さきや頬に追星とよばれる白いつぶつぶがあらわれます。からだの側面には青緑色の不規則な横じまがあらわれます。

せいそくばしょ
【生息場所】 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。流れのあるような場所を好み、水中の表層あたりを群れになって泳いでいることが多いです。

はんしよくき
【繁殖期】 5～8月頃

【その他】 徳島の川でよく見かける魚です。おどろくとよく水からとびだします。泳ぎがはやく、タモ網でつかまえるのは少し難しい魚です。繁殖期のオスはとてもきれいな色になります。

(執筆者：井藤大樹)

ハス *Opsariichthys uncirostris uncirostris*

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 8 ～ 25 cm

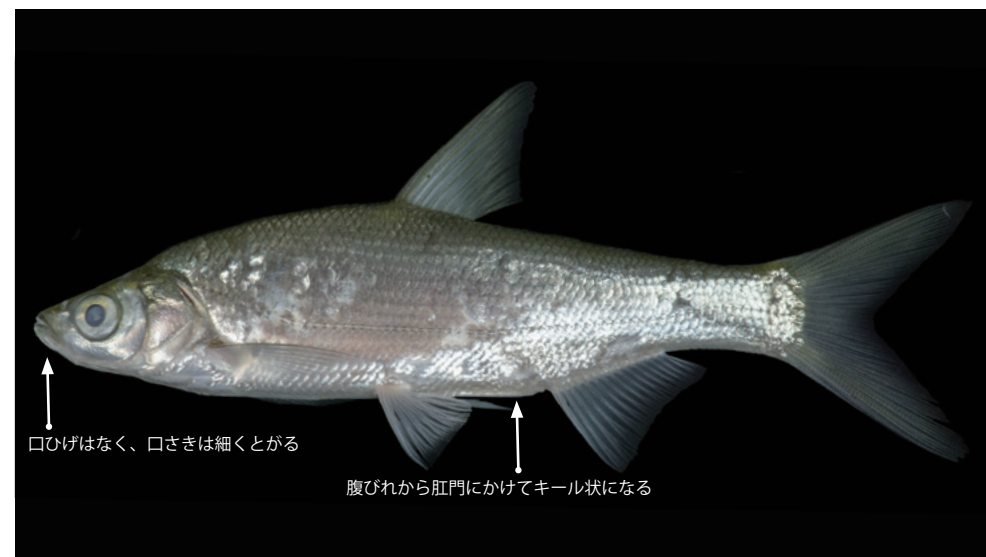
【からだの特徴】 ^{とくちょう}繁殖期のオスのからだの側面にはうっすらと青緑色の不規則な横じまがあらわれ、^{はんしよくき}臀びれが長くなります。小さな個体はオイカワに似ていますが、オイカワよりもほっそりとしています。口が大きく、「へ」の字に曲がっているのがハスの特徴です。

【生息場所】 ^{せいそくばしょ}大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。水中の中層から表層あたりを群れになって泳いでいることが多いです。

【繁殖期】 ^{はんしよくき}5 ～ 8 月頃

【その他】 ^{びわこ}日本では、琵琶湖と淀川、^{よどがわ}三方湖にのみ生息していましたが、琵琶湖のアユを各地で放流した時にまざりこみ、日本各地に広がりました。泳ぎが速く、他の魚を食べます。ハスは、環境省と農林水産省により『^{そうごうたいさくがいらいしゆ}総合対策外来種』に指定されています。

（執筆：古川 学）

ワタカ *Ischikauia steenackeri*

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 10 ～ 30 cm

【からだの特徴】 ^{とくちょう}からだは銀白色にかがやき、^{もよう}模様はありません。口はやや上向きで口さきは細くとがります。腹びれから^{こうもん}肛門にかけて包丁の刃の^{ほうちよう}部分のように細く盛り上がり（キール状）ます。

【生息場所】 ^{せいそくばしょ}大谷川や大谷川につながる水路で見られます。流れのゆるい場所を好み、中層を泳いでいます。

【繁殖期】 ^{はんしよくき}6 ～ 8 月頃

【その他】 ^{びわこ}世界中で琵琶湖と淀川だけに生息する魚でしたが、琵琶湖から持ち込まれたアユにまざりて、日本各地で放流されたと言われています。

（執筆：古川 学）

モツゴ *Pseudorasbora parva*



ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 3 ～ 6 cm

【からだの特徴】^{とくちよう}口さきから尾びれの付け根まで1本の黒い縦じまがあります。^{はんしよくき}繁殖期のオスは全身が黒っぽくなり、黒い縦じまはほとんど見えなくなります。また、^{はんしよくき}繁殖期のオスは、口さきに^{おいぼし}追星とよばれる白いつぶつぶがあらわれます。

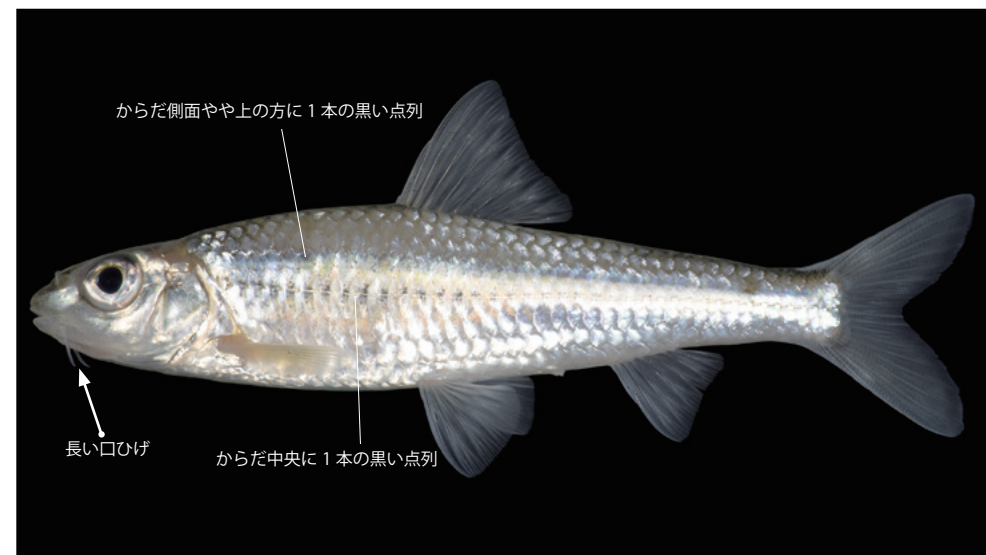
【生息場所】^{せいそくばしょ}大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。水中の中層あたりを^む群れになって泳いでいることが多いです。

【繁殖期】^{はんしよくき}4 ～ 7 月頃

【その他】モツゴの口は小さく、上向きで、釣りをしているとよくエサだけをとられます。^{はんしよくき}繁殖期になると、オスは石や流木などになわばりを持ちます。繁殖期のオスはよくケンカをします。2014年の徳島県版レッドリストでは『^{じゅんぜつめつきぐ}準絶滅危惧』に選定されています。

（執筆：井藤大樹）

コウライモロコ *Squalidus chankaensis tsuchigae*



ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 6 ～ 12 cm

【からだの特徴】^{とくちよう}長い口ひげがあるのが特徴です。^{とくちよう}からだの側面のやや上の方に1本、からだの中央に1本の黒い点列があります。

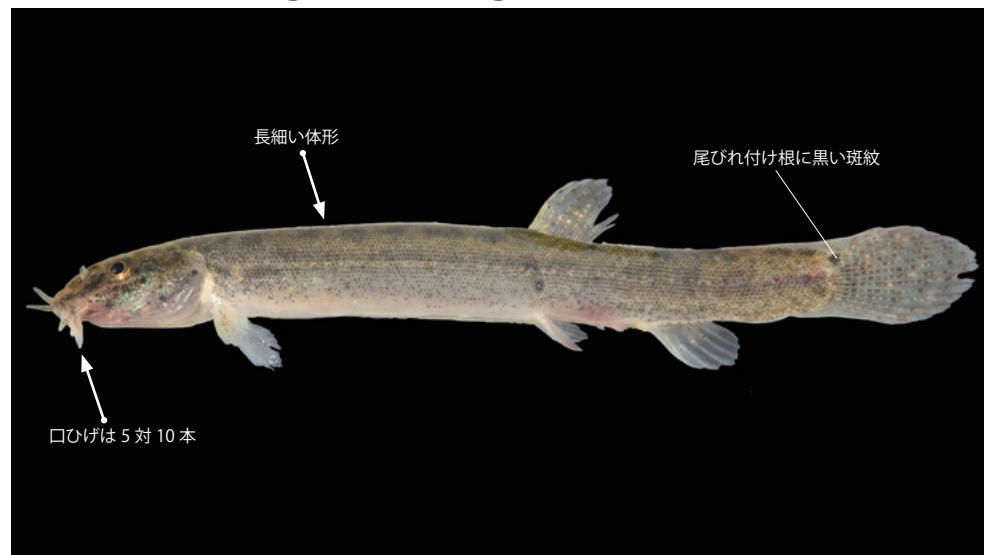
【生息場所】^{せいそくばしょ}大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。水中の底近くから中層あたりを^む群れになって泳いでいることが多いです。

【繁殖期】^{はんしよくき}5 ～ 6 月頃

【その他】大麻町周辺ではタモロコが生息していて、コウライモロコと似ています。タモロコではからだの側面の下の方に2～3列の黒い斑点があるため、コウライモロコと見分けられます。2014年の徳島県版レッドリストでは『^{りゅうい}留意』というカテゴリーに選定されています。

（執筆：井藤大樹）

ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus*



ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 5 ～ 15 cm

【からだの特徴】^{とくちよう} 細長い体形をしています。ひれには目立った模様はありませんが、^{もよう} 尾びれの付け根に黒い模様があります。エサを探すための口ひげが10本あります。

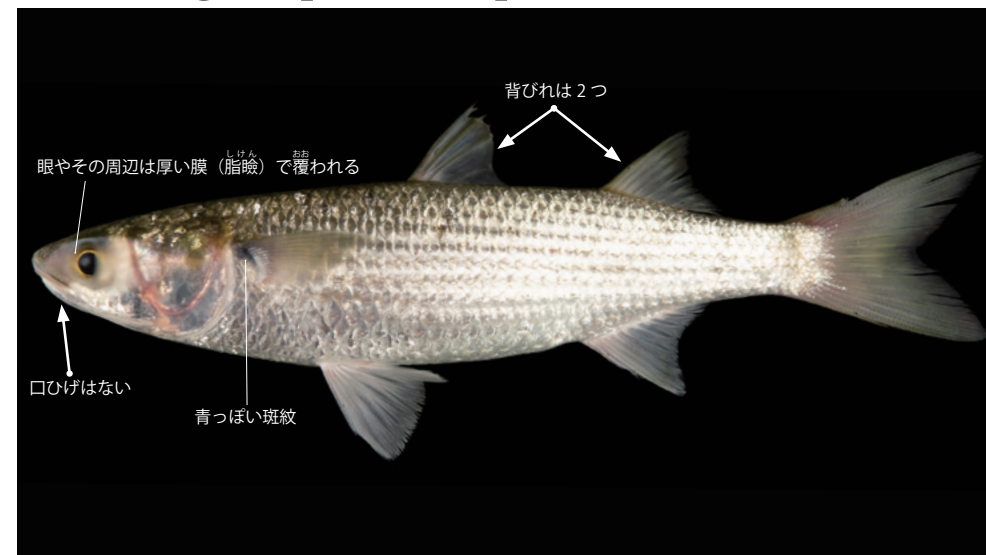
【生息場所】^{せいそくばしょ} 大谷川につながる水路やレンコン田、田んぼ、ビオトープに生息しています。流れがなく、浅い場所の泥底が好きで、おどろくと、身を守るために、泥の中に隠れます。^{かく}

【繁殖期】^{はんしよくき} 4 ～ 7 月頃

【その他】 うろこは皮ふにうもれていて、^{ねんまく} 粘膜でぬるぬるしています。水中の酸素が^{さんそ} 少ない場所では、口から空気を吸い込み、^{ちよう} 腸で酸素を取りこむことができます。ドジョウには、いくつかの種が含まれるようで、研究が進んでいます。2014年の徳島県版レッドリストでは『^{ぜつめつぎくにいるい} 絶滅危惧Ⅱ類』に選定されています。

（執筆：上田悠哉）

ボラ *Mugil cephalus cephalus*



ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 15 ～ 80 cm

【からだの特徴】^{とくちよう} 子供の頃の体形は、薄っぺらいですが、5 cm をこえると、背面から見ると頭でっちな逆三角形になります。背びれは2つあります。からだは全体的に銀色で、胸びれの付け根には青く丸い模様^{もよう}があります。眼の周辺は脂腺^{しけん}と呼ばれる膜で覆われます。

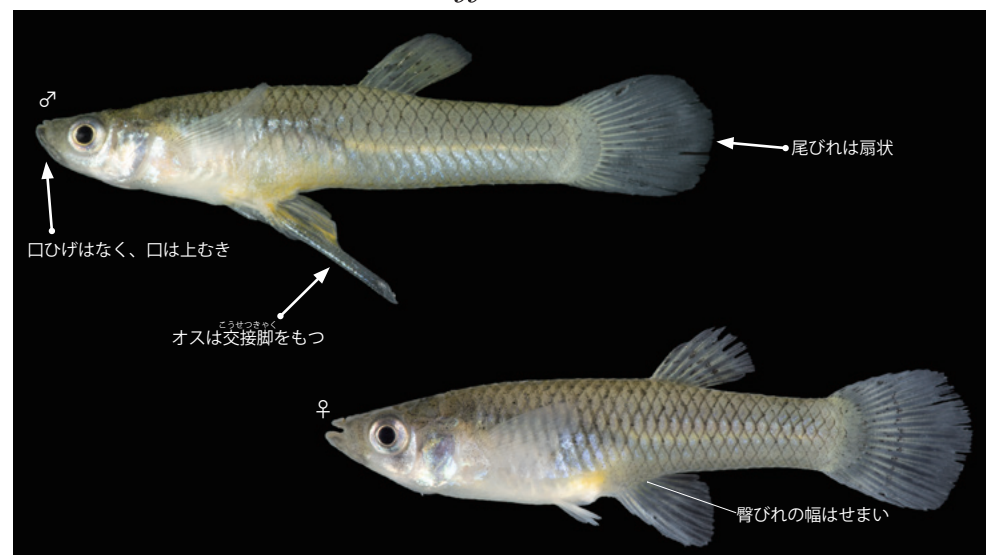
【生息場所】^{せいそくばしょ} おもな生息地は海ですが、川にも入りこみます。大谷川や大谷川につながる水路でも水面近くで群れる姿を見かけます。水の汚れに強く、街の中の川でもよく見られます。

【繁殖期】^{はんしよくき} 10 ～ 1 月頃

【その他】 もっとも身近な魚の一つで、日本中に生息します。水面からよくジャンプするので観察は簡単ですが、素早い^{くさ} ため、タモ網でつかまえるのは難しいです。釣り上げると臭く、いやがられることも多いですが、実はおいしい魚で、特に^{らんそう} 卵巣を調理したカラスミは高級食材です。^{ちようり}

（執筆：奥村大輝）

カダヤシ *Gambusia affinis*



写真の上がカダヤシのオス (♂)、下がメス (♀)

ひょうじゆんたいちよう
【標準体長】 2.5 ~ 4.5 cm (オス 2.5 cm、メス 4.5 cm ほど)

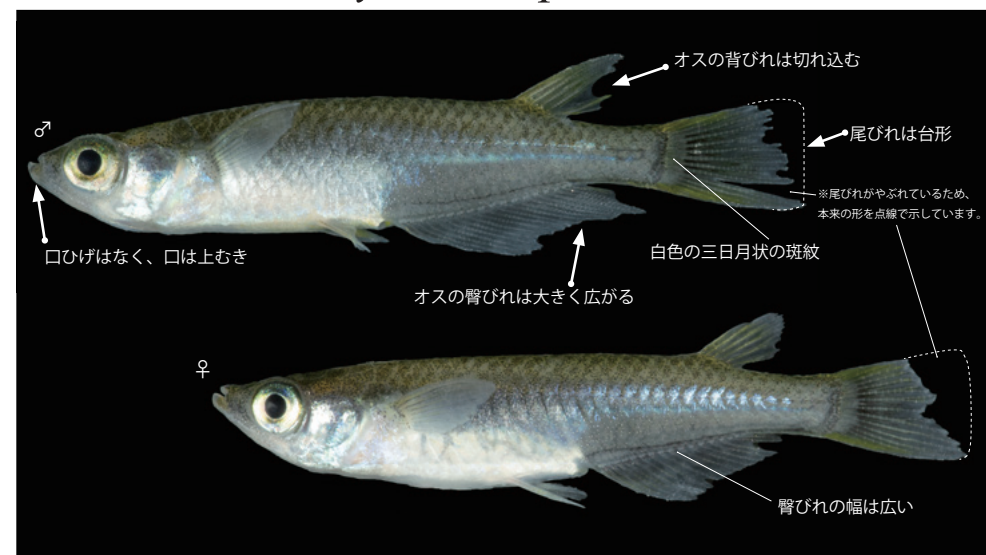
【からだの特徴】 ミナミメダカに似ていますが、それにくらべて体色はより青つぽく、臀びれや背びれの位置はより前です。臀びれの付け根の幅も短く、尾びれは扇状です。オスの臀びれは長い棒状の交接脚 (メスの体内に精子を送り込む器官) に変形しています。

【生息場所】 大谷川や大谷川につながる水路、レンコン田、田んぼ、ビオトープに生息しています。流れのゆるやかな場所を好みますが、塩分や水の汚れに強く、海につながる汽水の水路でも見られます。

はんしよくき
【繁殖期】 3 ~ 10 月頃

【その他】 北アメリカから持ち込まれた国外外来種で、環境省はカダヤシを『特定外来生物』に指定しています。『特定外来生物』に指定されている生きものは飼育したり、生きたまま別の場所に運ぶことが禁止されているので、注意が必要です。特にカダヤシはミナミメダカとよく似ているので、しっかりと見分けられるようにしましょう。
(執筆: 日 美由紀)

ミナミメダカ *Oryzias latipes*



写真の上がミナミメダカのオス (♂)、下がメス (♀)

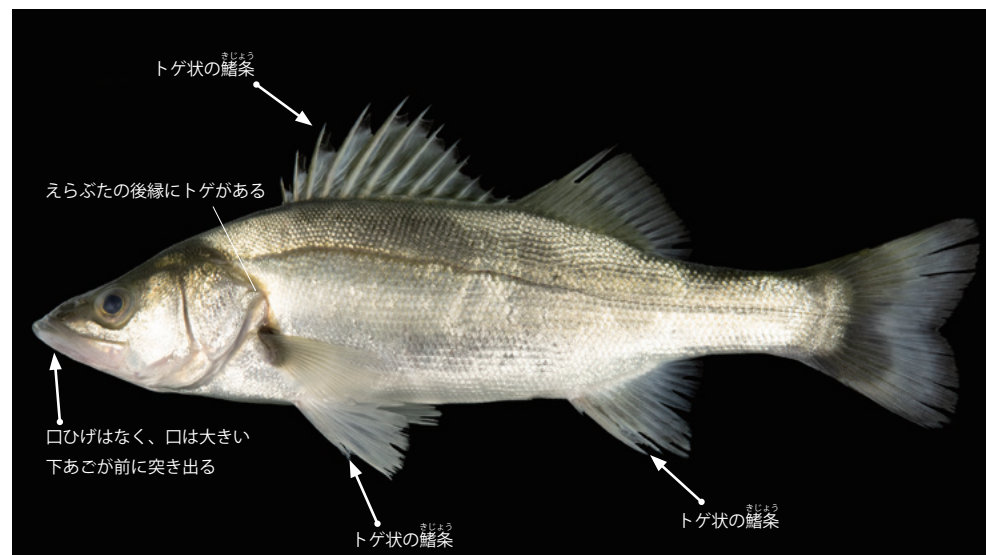
ひょうじゆんたいちよう
【標準体長】 3.5 ~ 4.5 cm

【からだの特徴】 上から見ると頭から尾にかけて黒い線があります (カダヤシにはありません)。臀びれは平行四辺形、尾びれは台形です。また、雌雄ともに尾びれの付け根に白色の三日月斑があります。オスは背びれに深い切れ込みがあり、臀びれがメスより大きくなります。

【生息場所】 大谷川や大谷川につながる水路、レンコン田、ビオトープに生息しています。流れがゆるやかで水草などがたくさんある浅い場所を好み、表層を群れになって泳いでいます。

はんしよくき
【繁殖期】 4 ~ 8 月頃

【その他】 ミナミメダカは地域によって DNA の特徴がちがった 10 のグループに分かれることが知られています。このようなちがいはミナミメダカが何十万年もの長い時間をかけてそれぞれの地域で進化してきたあかしです。ミナミメダカの中のちがい (遺伝的多様性) を無視した放流により、各地域の特徴が薄まったり、なくなったりしています。
(執筆: 日 美由紀)

スズキ *Lateolabrax japonicus*

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 15 ～ 90 cm

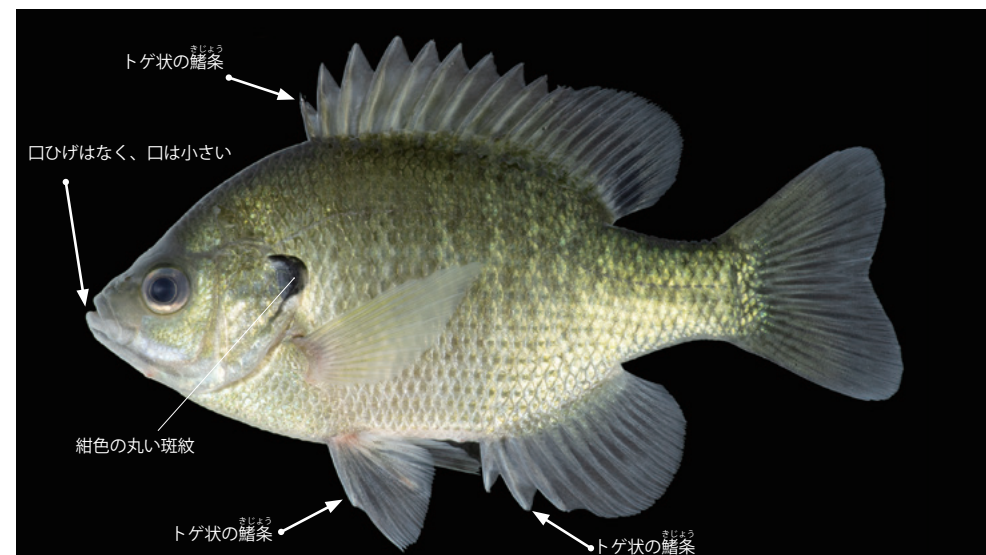
【からだの特徴】 背びれの前の方や、腹びれ、臀びれにトゲのような骨（鰭条）があります。えらぶたの骨もトゲのようになっています。口は大きく、下あごは前に突き出ます。小さな個体ではからだに小さな黒点をもつことがあります、眼よりも大きな模様はありません。

せいそくばしよ
【生息場所】 本来は河口の汽水域や海でくらす魚ですが、小さな個体は大谷川にも入ってきます。

はんしよくき
【繁殖期】 11 ～ 2 月頃

【その他】 海でくらすものでは、全長 1 m ほどになるものもいます。吉野川などの大きな川では 1 m にせまる大型の個体が見られることがありますが、大谷川で見られるのは 30 cm ほどの個体です。幼魚や若魚の方が、大型の個体よりもよく川や広い水路などの淡水域に入ってきます。

（執筆：井藤大樹）

ブルーギル *Lepomis macrochirus macrochirus*

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 8 ～ 25 cm

【からだの特徴】 からだが上下にひろく、薄っぺらな体形をしています。えらぶたに紺色の丸い斑紋があります。繁殖期には腹がオレンジ色になります。背びれの前の方はトゲのようになっています。腹びれや臀びれにもトゲのような骨（鰭条）があります。

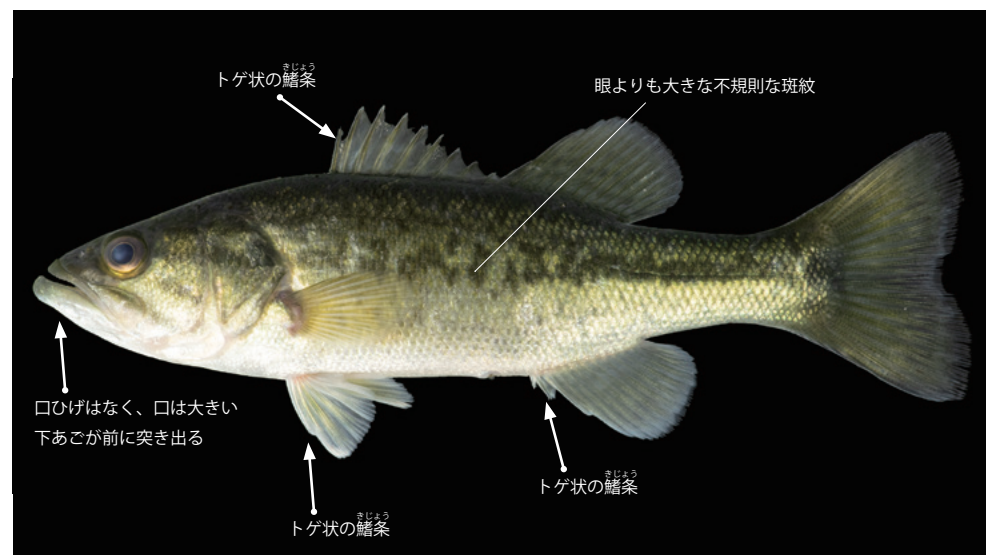
せいそくばしよ
【生息場所】 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。流れのあまりない場所を好みます。

はんしよくき
【繁殖期】 5 ～ 7 月頃

【その他】 北アメリカから持ち込まれた国外外来種で、環境省はブルーギルを『特定外来生物』に指定しています。雑食性で、さまざまな日本の在来生物を食べてしまいます。『特定外来生物』に指定されている生きものは飼育したり、生きたまま別の場所に運ぶことが禁止されているので、注意が必要です。

（執筆：井藤大樹）

オオクチバス *Micropterus salmoides*



園瀬川水系のため池産

【標準体長】 15 ～ 60 cm

【からだの特徴】 スズキによく似た体形をしていますが、スズキよりも各ひれは小さく、からだもずんぐりとしています。口は大きく、からだには黒い斑紋があります。

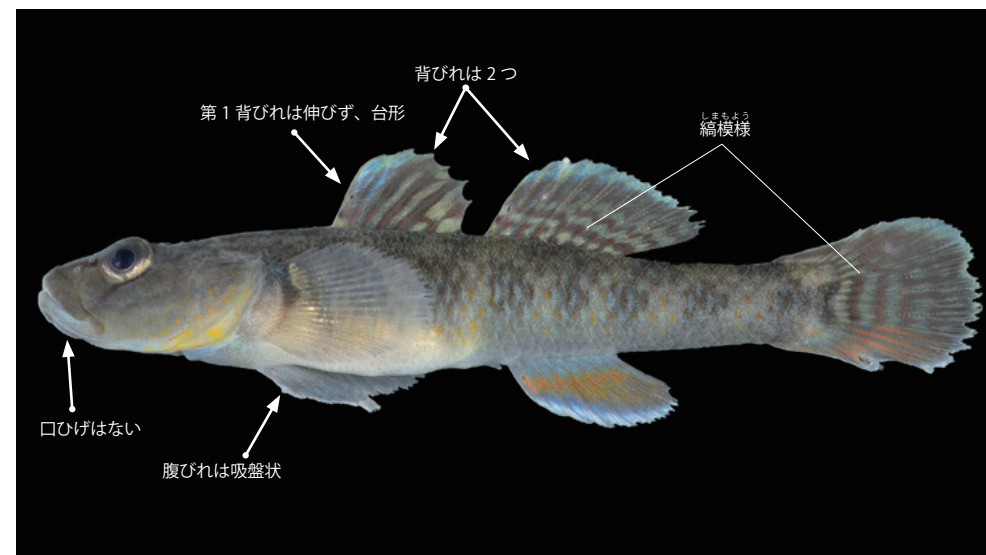
【生息場所】 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。流れのあまりない場所を好みます。

【繁殖期】 4 ～ 6 月頃

【その他】 北アメリカから持ち込まれた国外外来種で、環境省はオオクチバスを『特定外来生物』に指定しています。肉食性で、さまざまな日本の在来動物を食べてしまいます。『特定外来生物』に指定されている生きものは飼育したり、生きたまま別の場所に運ぶことが禁止されているので、注意が必要です。

（執筆：井藤大樹）

シマヒレヨシノボリ *Rhinogobius tyoni*



【標準体長】 3 ～ 5 cm

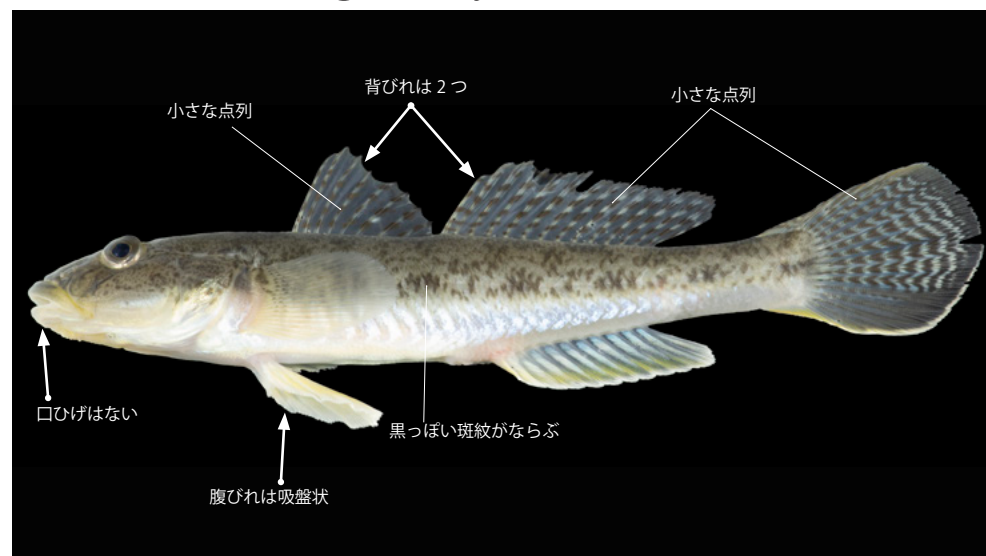
【からだの特徴】 背びれは2つに分かれていて、腹びれは吸盤のようになっています。ヨシノボリのなかまの多くはオスの第1背びれが長く伸びますが、シマヒレヨシノボリは伸びず、台形のような形です。第2背びれと尾びれには点列があり、それが縞模様に見えます。

【生息場所】 大谷川や、大谷川につながる水路に生息しています。流れのあまりない場所の石の下などでくらしています。

【繁殖期】 5 ～ 7 月頃

【その他】 ヨシノボリのなかまは多くが川で産卵し、仔稚魚が海にくだりますが、シマヒレヨシノボリは一生を川や水路、ため池などの淡水域ですごします。2020年の環境省版レッドリストと2014年の徳島県版レッドリストでは『準絶滅危惧』に選定されています。

（執筆：井藤大樹）

マハゼ *Acanthogobius flavimanus*

ひょうじゅんたいちよう
【標準体長】 10 ～ 20 cm

【からだの特徴】 からだは細長く、背中^{とくちよう}は灰色で、お腹は白色です。背びれは2つで、黒と白の点列があります。この点列は尾びれにもあります。腹びれ^{きゆうばんじよう}は吸盤状になっており、岩や地面にはりつくことができます。

せいそくばしよ
【生息場所】 おもな生息地は海ですが、川にも生息します。大谷川でもあたたかくなると海からやってきます。砂や泥底に多く見られますが、水の汚れにも比較^{ひかくてき}的強く、ヘドロの多い場所でも見られます。

はんしよくき
【繁殖期】 1 ～ 5 月頃

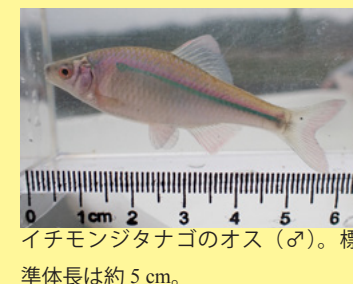
【その他】 関東では天ぷらが人気で、よく食べられます。徳島の川でもよく見られ、吉野川周辺ではマハゼ釣りを楽しむ家族が見られますが、好んで食べられていないようです。また、ハゼのなかまは日本だけで600種類以上いると言われています。徳島にも色んなハゼがいるので、この図鑑^のに載っていない種類も探してみましょう。

(執筆者：奥村大輝)

この図鑑でとりあげられなかった魚たち

コウノトリ生息エリアにはまだまだたくさんの魚がいます。名前だけでも知ってもらいたいので、標準和名と学名を以下に書いておきます。興味のある人はぜひとも調べてみてください。

- ・ニホンウナギ *Anguilla japonica*
- ・コイ^{しいうがた} (飼育型) *Cyprinus carpio*
- ・ゲンゴロウブナ (ヘラブナ) *Carassius cuvieri*
- ・オオキンブナ *Carassius buergeri buergeri*
- ・イチモンジタナゴ *Acheilognathus cyanostigma*
- ・ヌマムツ *Candidia sieboldii*
- ・カワバタモロコ *Hemigrammocypripis neglecta*
- ・ヒガイ *Sarcocheilichthys variegatus*
- ・タモロコ *Gnathopogon elongatus elongatus*
- ・コウライニゴイ *Hemibarbus labeo*
- ・ナマズ *Silurus asotus*
- ・ナイルティラピア *Oreochromis niloticus*
- ・カムルチー *Channa argus*



イチモンジタナゴのオス (♂)。標準体長は約 5 cm。



写真の上がカワバタモロコのオス (♂)、下がメス (♀)。オスは標準体長約 2.5 cm、メスは約 4 cm。

これらのうち、コイ (飼育型) とナイルティラピア、カムルチーは国外外来種で、ゲンゴロウブナとヒガイは国内外来種です。また、イチモンジタナゴも国内外来種の可能性があります。

カワバタモロコは、かつて鳴門市の水路に生息していましたが、外来種が増えたことや、生息環境^{あつか}の悪化などによって、今では姿を見ることができないほど少なくなっていました。

コラム① レッドリスト

レッドリストとは、絶滅のおそれのある生きものをまとめたリストのことです。日本では、環境省が日本全国の生きもののレッドリストを作成しているほか、都道府県や市町村、NGOなどもそれぞれの地域などに生息する生きもののレッドリストを作成しています。これらのレッドリストは生物多様性の危機を広く伝えることや、保全に役立っています。

レッドリストでは、絶滅のおそれがどれくらいあるかによって、いくつかの категорияに分けられています。下の表は、環境省と徳島県のレッドリストでの категорияです。

環境省版レッドリスト

絶滅	すでに絶滅したと考えられる種	↑ 絶滅の危険度 ↓
野生絶滅	飼育・栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種	
絶滅危惧Ⅰ類	絶滅の危機に瀕している種	
絶滅危惧ⅠA類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの	
絶滅危惧ⅠB類	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの	
絶滅危惧Ⅱ類	絶滅の危険が増大している種	
準絶滅危惧	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧Ⅰ類」に移行する可能性のある種	
情報不足	評価するだけの情報が不足している種	
絶滅のおそれのある地域個体群	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの	

徳島県版レッドリスト

絶滅	過去に徳島県に生息・生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、徳島県ではすでに絶滅したと考えられるもの	↑ 絶滅の危険度 ↓
野生絶滅	過去に徳島県に生息・生育したことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、徳島県において野生ではすでに絶滅したと考えられるもの	
絶滅危惧Ⅰ類	現在の生息・生育状況をもたらし圧迫要因が引き続き作用すると野生での存続が困難なもの	
絶滅危惧ⅠA類	ごく近い将来、野生での絶滅の危険性が極めて高いもので、主要な生息・生育地が1〜3カ所しかないもの	
絶滅危惧ⅠB類	ⅠA類ほどではないが、近い将来、野生での絶滅の危険性が高いもの	
絶滅危惧Ⅱ類	現在の生息・生育状況をもたらし圧迫要因が引き続き作用すると近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの	
準絶滅危惧	現時点での絶滅危険度は高くないが、生息・生育状況の変化によっては上位ランクに移行する可能性があるもの	
留意	生息・生育状況の変化によって上位の категорияに移行しうる属性を有しているが、ランクを判定するに足る情報が得られていないもの	

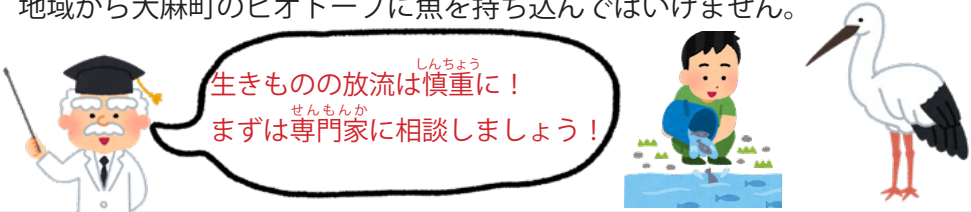
コラム② がいらいしゅ ほうりゅう 外来種と放流

外来種とは、その生きものが本来生息していない場所に人によって持ち込まれた生きもののことです。外来種の中には、外国から日本に持ち込まれた“国外外来種”と、日本のある地域から別の地域に持ち込まれた“国内外来種”とがあります。国外外来種は、オオクチバスやウシガエルなど、日本の生きものに与える悪影響も含めて、だんだんと知られるようになってきました。一方、国内外来種は日本の生きものですが、何が問題なのでしょうか。

国外からでも国内からでも、その場所に本来いないはずの生きものが持ち込まれると、その場所にいる生きものを食べてしまったり、生きものどうしのすみかやエサの取り合いが激しくなったりするので、必ずなにかしらの影響があります。また、寄生虫や病原菌なども一緒に持ち込まれ、もともとその場所にいる生きものが死んでしまうこともあります。

さらには、持ち込まれた先に同じ種類の生きものがいた場合、それらは交配します。日本にすんでいる同じ種類の生きものでも、地域によって、遺伝子や、場合によっては姿形、行動などが少しずつちがっていることが、いろいろな生きものでわかってきています。同じ日本でも、地域によって環境はさまざまで、生きものたちはそれぞれの地域で長い年月をかけて進化してきました。国内外来種はその進化の歴史を乱してしまうのです。

魚を放流する時には、国外外来種をこれ以上広めないかということはもちろんのこと、放流する魚が国内外来種になってしまわないかにも注意する必要があります。コウノトリのエサになるからといって、まったく別の地域から大麻町のビオトープに魚を持ち込んではいけません。



コラム③ 特定外来生物と生態系被害防止外来種リスト

特定外来生物とは、明治時代以降に日本に持ち込まれた、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす、または及ぼすおそれのある外来種の中から、外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）に基づいて指定された生きもの（生きているものに限り、卵や種子なども含まれる）のことです。

特定外来生物に指定された生きものは、生きたまま別の場所に運ぶこと、飼育すること、野外に放すこと（つかまえたものをその場でただちに放すことは禁止されていない）が外来生物法によって原則として禁止されています。この法律に違反すると、罰則がありますので、特定外来生物の取り扱いには十分に注意しなくてはなりません。

生態系被害防止外来種リストは、環境省と農林水産省が作成した、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす、またはそのおそれがある外来種のリストです。さまざまな外来種が日本に入り込んでいますが、その中でも特に日本の生態系や、農業、漁業などに被害を与える外来種をまとめたものということです。このリストに掲載されているからといって、特定外来生物以外は、特に規制などがあるわけではありませんが、このリストに載っている生きものを日本に持ちこんだり、すでに持ち込まれている生きものがこれ以上、ひろがらないように国が呼びかけているものです。



特定外来生物に指定されているオオクチバス

定着予防外来種（定着を予防する外来種）

まだ日本に定着していないもの

- ・侵入予防外来種
- ・その他の定着予防外来種

総合対策外来種（総合的に対策が必要な外来種）

日本に定着しているもの

- ・緊急対策外来種
- ・重点対策外来種
- ・その他の総合対策外来種

産業管理外来種

（適切な管理が必要な産業上重要な外来種）

産業などで重要で、代わりがないもの

環境省自然環境局（2015）を改定
生態系被害防止外来種リストのカテゴリ区分



参考文献

細谷和海，2019．増補改訂日本の淡水魚．559pp．山と溪谷社．

環境省自然環境局，2015．生態系被害防止外来種リスト：<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list/list.pdf>（2021年10月29日閲覧）．

環境省，2020．環境省レッドリスト2020：<http://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf>（2021年10月29日閲覧）．

徳島県希少野生生物保護検討委員会，2014．徳島県版レッドリスト（改訂版）：

https://www.pref.tokushima.lg.jp/kankyo/kankoubutu/red_date.html/

（2021年10月29日閲覧）．

コウノトリ生息エリアの魚類図鑑

2021年12月24日発行

著者 阿波魚類研究会（監修・編集：井藤大樹）

発行 特定非営利活動法人とくしまコウノトリ基金

連絡先 〒771-0203 徳島県板野郡北島町中村字岸ノ上1-288

TEL：090-2825-6721

助成 この図鑑は、トヨタ自動車株式会社のトヨタ環境活動助成プログラムの助成を受けて作成しています。